

構成的グループエンカウンターを活用した授業の学習集団内の人間関係と自己意識への影響に関するパイロットスタディ

岡田 弘

A Pilot Study of the Effect of Structured Group Encounter-Oriented Teaching Method on the Human Relations Among Classmates and Their Self-Awareness

HIROSHI OKADA

This study aims to verify that it is possible to make human relationship and to foster self-awareness by Structured Group Encounter oriented teaching method in Junior College. A class with most enrollement of students was chosen as a sample for this study. The scores of WAI were compared to those of the contrast group of Makita, and There were found differences of WAI scores between the experimental group (Okada's group) and contrast group (Makita's group).

リレーションづくりにかかわる人間の態度形成と集団についてクレッチャリ¹⁾は、広汎なデータをもとに、態度の構造を明らかにした。態度の形成に及ぼすさまざまな要因については、次の4つにまとめられている。1 欲求充足の過程 2 提示された情報 3 集団への所属 4 個人の性格である。こうした態度形成の要因や特性から、人間は相手の態度を知ること、人間関係を円滑にすすめられることを明らかにした。

また、自分を集団に参加させ、多少いやなことがあっても引き止めておく、集団の魅力について、その源泉をカートライト²⁾は、集団それ自体に魅力を感じている場合と個人に集団とは別の目標があり、その目的を達成す

るための充足手段としてその集団に魅力を感じている場合とした。

1970年に國分³⁾によって提唱された構成的グループエンカウンター (Structured Group Encounter: 以下SGEとする) は、集団を対象にクレッチャリやカートライトの研究成果を具現化する方法である。SGEとは、集団を健全に育み、集団内の成員一人一人と温かな人間関係を結びながら、自己開示を通して新たな自己発見をする集中的グループ体験の一つである。國分³⁾は「ありたいようなあり方を模索する能動的な方法として、エクササイズという誘発剤とグループの教育機能を活用したサイコエジュケーション」と定義している。「サイコエジュケーションとは、集団に対して、

Key Words: Structured Group Encounter, psycho education, Self-disclosure (自己開示)
Human Relation, Self-awareness (自己意識)

心理学的な考え方や行動の仕方を能動的に教える方法」⁴⁾のことである。

サイコエジュケーションの中で、最も人間関係づくりに有効な方法が、SGE である。SGE による人間関係づくりの研究は1979年の國分ら⁵⁾の「大学生の人間関係開発のプログラムとその効果に関するパイロットスタディ」によって開始された。國分らの研究は、1994年の「その54」まで行われた。この間にSGE が人間関係づくりに有効であるとした実証的研究が1989年片野ら⁶⁾、1990年山本⁷⁾、1991年村久保⁸⁾によって相次いで発表された。

1996年から岡田⁹⁾はSGE が入学当初の集団の人間関係づくりに有効であることを連続で検証^{10ab)}した。さらに、SGE を授業に活用し、授業時間内でも人間関係の広がりができることを実証した研究が吉田¹¹⁾によってなされた。

こうした研究と相俟って國分ら¹²⁾は、開発的・予防的カウンセリングとして育てるカウンセリングを提唱した。「集団を対象にし、積極的・能動的で、現実原則志向（関係性志向）のカウンセリング」¹³⁾である。集団を対象にした予防的・開発的カウンセリングがサイコエジュケーションである。育てるカウンセリングは、思考と感情と行動に変化を与える援助活動である。育てるカウンセリングの具体的な方法として、SGE、キャリア・ガイダンス、グループ体験、対話のある授業がある。

岡田¹⁴⁾は、育てるカウンセリングの具体的な方法としてのSGE による授業実践について研究報告をした。これを踏まえて、本研究は、育てるカウンセリングの方法としてのSGE を、国語表現の講義のねらい達成の手段として実施しても、SGE の機能である自己育成と、人間関係づくりが容易になされることを検証しようとするものである。すなわち、本研究の目的は、次の通りである。

- 1 講義の中で実施されるサイコエジュケーションとしてのSGE であっても、その講義に参加する受講生の人間関係を容易に形成することを検証する。

- 2 講義の中で実施されるサイコエジュケーションとしてのSGE であっても、自己開示をとおして、その講義に参加する受講生の自己を育むことを検証する。

方 法

1. 調査対象

SGE を活用した講義を実施するのは、本学における国語表現の6つのクラスである。実験群と統制群を取ることで学習効果に著しい差がでることが予想される。そこで、講義の中で実施できる自由記述によって研究目的を検証できる技法を用いることとした。そこで、サンプリングデータを多く抽出できる出席率の最も良いクラスを調査対象とした。国語表現の講義は12回実施されている。この講義を受講した学生数が多く、最も出席率の高かったのは、平成11年度に入学した1年ND(女子51名)クラスであった。このクラスは、9月のスタートから1月24日までに実施された12回の国語表現の講義を3回以上欠席した者は1人もいなかった。また、途中で講義を辞退する者もいなかった。この講義は、毎週月曜日の4時限目(14:40~16:10)に実施された。

2. 道具

本研究において、講義の受講者の自己概念及び人間関係をみるためにKuhn & Partlandによって考案されたWAI(“Who am I” technique)技法『TST(Twenty Statment Test)ともいう』を用いた。WAI技法を用いたSelf-Imageの研究が、楨田・岩熊ら¹⁶⁾によってなされている。楨田らは、WAIの反応内容を分析して、表1に示す8つの大項目と168の小項目にカテゴライズした。そして、これらの項目への平均反応数を図1-1のように示した。さらに、言及率を図1-2のように示した。その結果、20代前後の女性の特徴的傾向として、自分の性格についての力動的側面への反応が増える傾向のあることを検証した。性格の情意的側面への反応がそれほど高くないことも検証した。また、能力

表 1 最終版基準書の概要（槇田・岩熊）

	大項目名	内 容	小項目数
1	社 会	名前、性別、年齢、住所、出身・育ち、職業、学校、所属団体、経歴などについての記述。交友関係、経済状態についての記述。	17
2	家 庭	血縁的役割、家族、家庭についての記述。	11
3	身 体	容姿・体格、健康・体質、身体機能・身体的能力などについての記述。	3
4	能 力	知的な能力、個別の能力、適応力、一般的な能力、資格・免許などについての記述。	9
5	情 意	自分の性格についての記述のうち、情意的側面について記述したもの。	42
6	力 動	自分の性格についての記述のうち、力動的側面について記述したもの。	27
7	指 向	自己に対する感情・評価などについての記述。欲求、願望、希望などについての記述。態度、キャセクションなどについての記述。「私は私」、「私は誰」、実存的な記述。生物学的・文化的規定、隠喩的な表現など。	55
8	その他	WAI に対する批判、無効回答など。該当する小項目のない回答。	3
9	無回答	無回答。	1

計168

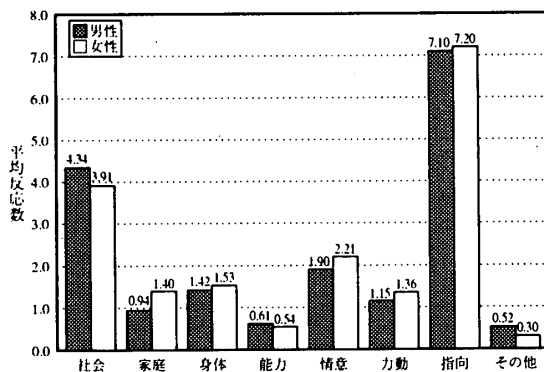


図 1-1 大項目の平均反応数
（槇田、岩熊、西村）

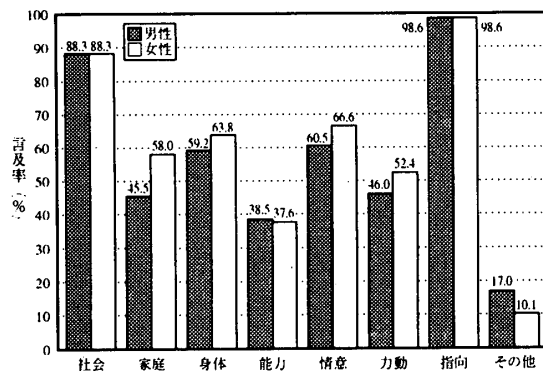


図 1-2 大項目の言及率
（槇田、岩熊、西村）

についての反応が低いことも検証した。

山田¹⁷⁾は、WAI の反応を分析して年齢が加算されるに従って、生活態度、対人関係、性格、気質、対自己評価といった内面の記述が増加することを検証した。

松原¹⁸⁾はこれらの成果をまとめる形で「自分発見 20の私」を報告した。

WAI 技法の特徴は、被験者が自由記述で

き、その記述を槇田らによってなされた項目にカテゴリー分けできることである。これによって、被験者の自己概念や人間関係を数値化できることである。

本研究では、SGE を実施後、WAI 技法を実施し、その反応を大項目の社会(交友関係)・力動的性格・情意的性格・能力の項目にしほって検討しようとするものである。SGE 実施

の結果、人間関係づくりや自己育成の効果が現れているならば、交友関係や能力の反応パターンが槇田らの検証した実験結果より多くの反応としてあらわれると考えられるからである。また、情意や力動の反応数の差異を検討することによってSGEのもたらす自己概念への影響を検討できるからである。

3. SGEの実施及び調査の実施

SGEは、12回の講義中、前半の6回で実施された。1回の講義の時間は90分である。今回実施されたSGEは、あくまで講義のねらいを達成するための手段としての実施であり、SGEそのものを実施するのではない。各回の講義のねらいとそのねらいを達成するために実施したエクササイズは表2のとおりである。

表2 講義のねらいとエクササイズ一覧

第1回目	ねらい	出会いの表現 対人コミュニケーションスキルの基礎
	EX	ハッピーバースデー・ジャンケン手の甲叩き ・背中合わせの会話・駅のベンチの会話・肩たたき・2人組鉛筆シェアリング
第2回目	ねらい	日本語の特質を知る
	EX	アウチ・2人組インタビュー・4人組他者紹介 ・2人組鉛筆シェアリング
第3回目	ねらい	コミュニケーションの方法を知る
	EX	伝言ゲーム・顔書きゲーム ・2人組鉛筆シェアリング
第4回目	ねらい	ことばによる伝達の方法を知る
	EX	アイコンタクト・拒否と受容のロールプレイ ・自立訓練によるリラクゼーション ・2人組鉛筆シェアリング
第5回目	ねらい	パブリックスピーキングの方法を知る
	EX	サイコロ説明ゲーム・早口言葉ゲーム ・2人組鉛筆シェアリング
第6回目	ねらい	ことばの使い方を知る
	EX	発声練習ゲーム・イメージ伝言ゲーム ・2人組鉛筆シェアリング

EXはエクササイズの略

以上のSGEを体験後、文章表現に関する講義と実習を5時間実施。最終講義の日（1月24日）に今までの講義のまとめとして、全

体を再度振り返った後、WAIを実施した。WAIは、私を主語にして20の私に関する短文を記すものである。今回は、最後に20の私に関する短文を読み直し、自分自身について感じたこと、気づいたことを自由記述させた。

4. 分析方法

WAIの反応を槇田らの分類した項目の中から、社会の交友関係・能力・情意・力動にしぼって反応数を検出した。槇田らの研究成果との比較によって、交友関係の反応数と能力の反応数が高くなれば、講義の中で実施されるSGEであっても、その講義に参加する受講生の人間関係を容易に形成するといえるからである。さらに、情意・力動の反応数が多く検出されれば、自己意識へSGEが多く影響していると考えられる。すなわち、SGEにおける自己開示をとおして、その講義に参加する受講生の自己育成がなされていると考えられるのである。

結 果

得られたWAIの総反応数は、1020である。51名全員が20項目の短文を書いた。このうち、交友関係に該当するものが266(26.07%)、能力に該当するものが208(20.39%)、情意に該当するものが、320(31.37%)、力動に該当するものが76(7.45%)、その他150(14.7%)であった。

表3 WAI反応のカテゴリー別反応数

項 目	反応数	%
交友関係	266	26.07
能力	208	20.39
情意	320	31.37
力動	76	7.45
その他	150	14.70
計	1020	99.98

反応数=51人×20項目=1020

考 察

表3に示された数値は、予想を逸かに超え

て、講義のねらい達成の手段としてのSGEの実施であっても、人間関係づくりや自己の育成に寄与していることを示している。

槇田らのカテゴリーの大項目中の社会に属する交友関係の反応数が26.07%であった。槇田らが示した一般的反応数8.25%を遥かに上まわる数値である。従来のSGEの効果研究では、SGEのみの展開をして効果測定された。本研究では、講義のねらい達成の手段としてのSGEの実施にもかかわらず、SGEが人間関係づくりに有効に働くことを示している。この原因として考えられるのは、実施したエクササイズプログラムが、講義のねらい達成のためのものであるにもかかわらず人間関係づくりにふさわしいものであったと考えられる。今後このプログラムをSGEのみの展開で実施し、今回との効果の差を検討することによって人間関係づくりに有効な新たなプログラム提示ができることになる。

次に、能力の項目であるが、これも20.39%を示した。槇田らの示す1.15%を上まわるこの数字は、自己への関心のあらわれととらえることができる。槇田が示すように指向の項目が顕著になるのが一般的であるが、今回の検出反応数はSGEが自己の育成に大きく貢献していることを示している。これは、毎回実施されて鉛筆シェアリングが大きく作用していることが考えられる。毎回講義を通して感じたこと、考えたことを記し、2人ペアがお互いに交換し、パートナーの記述（自己開示）によってさらに感じたこと気づいたことを筆記して、フィードバックしあうのが鉛筆シェアリングである。ここでなされた自己開示が自己への気づきを促し、自己育成に大きく貢献したと考えられる。

さて、力動の項目であるが、これは槇田らの研究では、2.51%であり、特に20代前後の女性の反応が増えることが特徴的であった。今回の本研究での反応数は、力動よりも、情意の反応数が遥かに優位であった。情意の反応数が31.37%と最も高い数値を示した。これは、SGEの特徴をよく示すものであると考え

られる。すなわち、SGEは感情面への働きかけが多彩であり、その結果が素直に反応数として示されたと考えられるからである。これまでのSGEの実証的研究では、感情面への有効な作用が確認されている。今回の本研究もこれを追試したことになる。さて、それではこの結果は、SGEが自己概念への影響を与えていないといえるであろうか。自己の感情への気づきは、自己の行動変容への第一歩となるものである。カウスセリング場面での問題解決のスタートが、自己の感情への気づき（多くはネガティブな感情）であることからこのことはいえよう。したがって、今回の結果は、槇田らの研究結果とはやや異なるものの感情への気づきをとおして、自己概念に影響を与えたと考えることができる。この点に関する詳細な検討は、今後の研究の課題としたい。

さて、本研究では先行研究の中から槇田の研究における調査結果を用いた。先行研究の中で本研究の母集団との等質性が最も近いものを抽出できると判断したからである。しかし、槇田の研究の母集団と本研究の母集団では、その等質性に介入変数が介在していることは否めない。槇田の研究との比較において国語表現の講義そのものが介入変数とも考えられる。そこで、今後の研究の課題として、SGEなしの国語表現の講義との比較研究が望まれる。

なお、WAIの最後に行った自由記述の中から、本研究の目的を十分に達成していると言える記述を列挙し、本研究の検証の一部としたい。

- ・私は、全体的に人間関係を学んだ気がする。人間関係の中でもIメッセージに一番興味をもった。親との言い争いのとき実際に使ってみて、とてもよい結果になった。
- ・人とのつき合い方がわかったようや気がする。自分は弱い人間だと思った。でも、それを支えてくれる人がたくさんいます。とても幸せだと思いました。
- ・こんなにもいろいろな感情が自分自身の中

であったことに驚いた。この講義の中で、自分の心の中で思っていることがけっこう素直に書けるようになりました。

- ・私は、人の影響を受けやすいのかなと思った。でもそれで私は良い方向に変わるのなら、いいではないかと思った。今までに出会った人、これから出会う人、いろんな人と心の触れあいを持ち、自分自身を育てて行きたいと思う。
- ・どうやら私は暗い。入学当初の不安な気持ちをずっと引きずっている。仲良くなった友達とギクシャクしたり、実験実習のメンバーとギクシャクしたり、かなりまいっていた。反面新たに出会った友達との素晴らしいコミュニケーションの場となっていた。つらかったり、楽しかったり感情を出してしまう講義だったと思う。
- ・この授業で友達との仲を深めることができたととても良かったと思っています。
- ・この講義を通して友達を作れたことが一番うれしかった。そして、講義では自分の気持ちなどを素直に表現できるようになった。
- ・精神的とか、人間的にたくさんのかんじを感じて学べた気がする。自分の事ってわかっているようで、全然わかっていなかった気がする。
- ・友達とかとも上手にコミュニケーションできない。
- ・私はかなり友達が少ないので、自分がもっと明るくなって友達を増やしたい。

要 約

本研究は、講義の一部として実施するSGEであっても、人間関係づくりや自己育成を容易に達成できることを検証したものである。

WAI技法を用い人間関係及び自己概念を検討した結果、SGEが人間関係づくりや自己育成に有効に作用していることが検証された。そして、今後の検討課題として本研究で実施されたSGEプログラムが講義の一部ではなく、SGEのみのプログラムとして展開されたときの人間関係づくりにどう有効に働くかを

検討し、新たなモデルプログラムの作成を提示することである。

また、自己概念への影響を考えると、SGEの実施によって力動よりも情意への反応が顕著となった。したがって、今回の結果は、槇田らの研究結果とはやや異なるものとなった。この点に関する詳細な検討を今後の研究の課題としたい。

文 献

- 1) KRECH, D., CRUTCHFIELD, R.S&B ALLACHERY, E.L.: Individual in society. McGraw・HILL. (1962)
- 2) CARTWRIGHT, D. & ZANDER, A.: GROUP DYNAMIC(3rd ed.), HAPER. (1968)
- 3) 國分康孝, : 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房 (東京), P13 (1992),
- 4) 國分康孝, 片野智治, 小山望, 岡田弘: サイエジュケーション, 図書文化社, P 8 (1998)
- 5) 國分康孝, 菅沼憲治: 相談学研究, 12, P 3—P23 (1979).
- 6) 片野智治, 吉田隆江, カウンセリング研究, 21, P150—P159 (1989).
- 7) 山本銀次: カウンセリング研究, 23, P36—P46 (1990).
- 8) 村久保雅孝: カウンセリング学会23回大会記念論文集, P106—P107 (1991)
- 9) 岡田弘: カウンセリング学会29回大会記念論文集, P30 (1996)
- 10 a) 岡田弘: カウンセリング学会30回大会記念論文集, P51 (1997)
- 10 b) 岡田弘: カウンセリング学会31回大会記念論文集, P140 (1998)
- 11) 吉田隆江: カウンセリング学会29回大会記念論文集, P258 (1996)
- 12) 國分康孝, 上地安昭, 渡辺三枝子, 佐藤勝男: 育てるカウンセリング全書 図書文化社 (東京), (1998)
- 13) 國分康孝: カウンセリング研究, 32, P85—P89 (1999).

- 14) 岡田弘：カウンセリング学会32回大会記念論文集, P87—P88 (1999)
 - 15) KUHN, M.H., & MCPARTLAND, T.S.: An empirical investigation of selfattitudes. American Sociological Review, **19**, P69—P76 (1954).
 - 16) 横田 仁, 岩熊史朗：心理学研究, **60**, P237—P244 (1989).
 - 17) 山田ゆかり：心理学研究, **60**, P245—P252 (1989).
 - 18) 松原達哉：自分発見「20の私」東京書籍 (東京) (1999)
-